

複合動詞研究の概観とその展望

——日本語教育の視点からの考察——

松田 文子

要 旨

本稿の目的は、各分野で蓄積されてきた複合動詞研究の成果を概観し、その研究成果を踏まえた上で、日本語教育の視点から複合動詞研究の展望を探ろうとするものである。ここでは(1)結合条件及び分類に関する研究、(2)複合動詞後項の意味・用法に関する研究、(3)他の言語との対照研究の3つの観点から複合動詞研究全般を概観することに加え、多義の後項動詞に関する分類主体の意味研究の問題点を指摘した上で、それに対する解決策として認知意味論の手法を援用した研究を紹介する。語彙教育の視点からみた場合、「～こむ」など多義的な用法を詳細に分類するだけではその複雑さに目が行ってしまい、学習者の負担を軽減することはできないが、認知意味論を援用した分析では一見複雑にみえる用法を単純な一つの図式によって説明することが可能となり、日本語教育においても有用な示唆を与えてくれる可能性があると思われるからである。

最後に日本語教育における複合動詞研究の今後の展望として、(1)認知意味論を援用した意味研究の可能性と、十分な言語研究を踏まえた(2)複合動詞の習得研究、さらには(3)他の言語との対照研究の3点を提案する。

【キーワード】 統語的複合動詞、 語彙的複合動詞、 非能格動詞、 非対格動詞、 複合動詞後項

1. はじめに

ここでいう複合動詞とは、「泣き叫ぶ、呼び込む」のように前の動詞(＝前項動詞、以下 V1 と称する)の連用形にもう一つの動詞(＝後項動詞、以下 V2 渡渉する)が結合したものを指すが、日本語学習者にとって上級者になっても習得の難しい学習項目の一つであるといわれている。例えば、森田(1978: 73)は「学習者が日本語を学ぶ場合、教科書によって与えられる動詞のほとんどは単純動詞であり、それらの動詞を組み合わせた複合動詞については、学習の機会があまりない。したがって、複合動詞に関する知識が不十分なまま上級段階に進んでしまい、夥しい複合動詞の波にぶつかって困惑することになる。」と述べ、習得の難しさを指摘している。

このように、複合動詞の習得は難しいというのが一致した見方ではあるが、実際にどこがどのように難しいのかについては十分に明らかにされていない。そこで、本稿執筆に先立ち、大学院の日本語教育コースに所属する留学生 12 名を対象にアンケート調査をおこなった。得られた結果は次の3点にまとめられる。

i) 「結合条件」に関するもの：

① どんな動詞と結びつくのか分からない。

そのため、勝手に単語を作り出す危険性がある。

② 何故、「飲みこむ」といえるのに、「ご飯を食べこむ」「肉を噛みこむ」といわないのか。

ii) 「単純動詞」と「複合動詞」の意味的差異に関するもの：

③ 「書く」と「書きこむ」は勘で使い分けているが違いを求められると説明できない。また、どんな時複合動詞を使うのかがわからない。

iii) 「習得の方法」に関するもの：

④ 「～こむ」や「～きる」などは多くの V1 と結合する複合動詞は V1 と V2 の二つに分けて覚えようとしたが効果がなかった。

⑤ 「座る」と「座りこむ」など「単純動詞」と「複合動詞」の意味の違いを知りたい時、辞書を引くが、辞書を引いても説明が足りないことが多かった。

本稿は、上記のような第二言語学習者の習得困難点や疑問に関して国語学や日本語学及び言語学では

どのような知見が得られているかを概観し、日本語教育の立場からみて残されている問題は何かを明らかにした上で、今後どのような方向での複合動詞研究が求められるかについて一つの提案を試みようとするものである。

今まで複合動詞研究で扱われてきた多様なテーマをいくつかの観点から大きく分類すると、次のようになる。

複合動詞研究で扱われてきたテーマ

- (1)「体系的研究」：複合動詞の結合条件。分類などに関するテーマ
- (2)「意味的研究」：複合動詞後項の意味的側面に関するテーマ
- (3)「他の言語との対照研究」
- (4)「習得研究」

以下、テーマごとにそれぞれの主な研究について概観し、日本語教育に即して考えた場合、残された課題は何かについて述べる。尚、(4)習得研究はまだ緒についたばかりであり、十分な文献がないため、展望の項で述べることにする。

2. 体系的研究——結合条件及び分類に関する研究

複合動詞の結合条件・分類に関しては齋藤・石井(1997: 300-308)の「研究史素描」に詳しいが、ここではその代表的な研究を概観しておきたい。複合動詞の結合条件及び分類に関する研究には大きく分けて二つの流れがある。一つは寺村(1969)を出発点として長嶋——山本につながる記述的な視点に立つ研究の流れである。一方、影山(1993)は、抽象性の高い意味論(「概念意味論」)の枠組みで分析をおこない、その流れはその後、由本、松本に批判的に継承されている。以下ではまず、2.1で「寺村——長嶋——山本」の研究を概観し、2.2で「影山——由本——松本」の研究を概観する。

2.1 日本語学及び国語学における研究(「寺村——長嶋——山本」の流れ)

(1)寺村の研究(1978, 1984)

寺村(1978, 1984)は複合動詞の前項と後項の意味に着目し、それぞれの意味が複合動詞になっても保持されているかどうかの観点から次の4類型に分類した。

- 1 類： 自立語V＋自立語V (例：呼び入れる、握りつぶす、殴り殺す)
- 2 類： 自立語V＋付属語V (例：降り始める、呼びかける、泣き出す)
- 3 類： 付属語V＋自立語V (例：差し出す、振り向く、引き返す)
- 4 類： 付属語V＋付属語V (例：切り上げる、取り持つ、仕込む)

ここで自立語というものは、複合動詞になっても元の意味が保持されているものを指し、付属語というのは保持されていないものを指す。4 類型のうち、1 類と2 類はさまざまな語との組み合わせが可能であり、3 類と4 類は生産性が低いとされている。

(2)長嶋の研究(1976, 1997)

長嶋(1976)は、結合条件を寺村とは別の観点から2 類型に分類している。

I 類：v1+V2(修飾要素＋被修飾要素)

「N が(を、に)v1」とも言えるし、「N が(を、に)V2」と言えるもの。

(例：木を切り倒す。⇒木を切る、木を倒す)

II 類：V1+v2(被修飾要素＋修飾要素)

「N が(を、に)V1」とは言えるが、「N が(を、に)v2」とは言えないもの。

(例：犬が子供に噛みつく。⇒*犬が子供につく)

長嶋の分類は、I 類とII 類の分類基準が明示された点で寺村を一步進めたものであると評価される一方で、他の類型についての言及がないことも指摘されている(齋藤・石井 1997)。

(3)山本の研究(1984)

山本(1984)の研究は、上記の寺村と長嶋を統合したものである。山本は、複合動詞の格成分が前項動詞または後項動詞とどのような対応をみせるかに着目した。そして、その明示的基準により、複合動詞を以下の4 類型に分類した。

I 類：複合動詞の格成分が、前項動詞と後項動詞のそれぞれに対応関係にあるもの。

(例：泣き叫ぶ、抱きかかえる etc.)

II 類：複合動詞の格成分が前項動詞とは対応を示すが、後項動詞とは対応しないもの。

(例：静まり返る、走り通す etc.)

III 類：複合動詞の格成分が後項動詞とは対応する

が、前項動詞とは対応しないもの。

(例：打ち重なる、差し迫る etc.)

IV類：複合動詞の格成分が前項動詞とも後項動詞とも対応しないもの。

(例：取り乱す、引き立つ etc.)

山本の研究は、寺村が「意味的な観点」から分類したのに対して、「前項動詞と後項動詞の格支配がどのような形で関わり合っているのか」という「統語的な観点」から分類されたものである。

以上が、寺村(1969)を出発点とした複合動詞の分類についての概略であるが、日本語教育における pedagogical device としてみた場合、これらの分類は有効であろうか。寺村の4分類に即して言うなら、例えば2類(「自立語+付属語」)は、「書き上げる」(完成)、「読み返す」(反復)のように、後項動詞の意味が単独用法の意味とは異なる意味になっているため付属語として扱われるわけであるが、後項動詞が「自立語」か「付属語」かを学習者が判断するのは難しいのではないだろうか。これらの点をどうすれば明確にできるか、また教育現場にどう取り入れるかの工夫が今後の課題として残されているように思われる。

2.2 言語学的研究(「影山—由本—松本」の流れ)

(1)影山の研究(1993, 1996, 1997)

複合動詞の結合条件及び分類に関しては、言語学の方でも研究が進んでいる。その先鞭をつけたのは影山(1993)である。影山は「概念意味論(conceptual semantics)」の枠内で「語形成」という観点から複合動詞を扱っている。影山(またはそれに続く由本、松本)らの分類は、複合動詞には「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」があるという立場に立脚した分類である。簡単にいえば「統語的複合動詞」とは補文関係をとる複合動詞である。補文関係というのは、例えば「話し始める」は「話すことを始める」と言い換えられるように、前項動詞が後項動詞の目的語(または主語)となる関係を指す(例①②)。

例：①働きすぎる⇒働くことがすぎる(主述関係)

②しゃべり続ける⇒しゃべることを続ける(補足関係)

一方、「語彙的複合動詞」は「飛び上がる、押し開ける、受け取る、書き込む、泣き叫ぶ」などのように補文関係を取らないものを指す。そして

「語彙的複合動詞」の組み合わせはさらに5類型に分けられる。ここで5類型を提示する前に、動詞の種類について確認しておきたい。

影山(1997)は、非対格性(unaccusativity)¹という概念を日本語に当てはめて、日本語動詞を他動詞、非能格自動詞(unergative)、非対格自動詞(unaccusative)²の3種類に大別する。つまり、自動詞には「非能格自動詞」と「非対格自動詞」の2種類があるということである。誤解を恐れず大雑把にいつてしまえば、「非能格自動詞」は「意志動詞」であり、「非対格自動詞」は「無意志動詞」に相当すると考えてよい。例を挙げよう。

例：

①こどもが 走っている。(非能格自動詞)

x

②こどもが 花瓶を 割った。(他動詞)

x

<y>

③ 花瓶が 割れた。(非対格自動詞)

<y>

さて、影山(1997)は動詞の種類を上記の3種類に大別した上で、それぞれの動詞の項構造を以下のように説明している。詳細は影山(1997)を参照されたいが、xを外項とし、yを内項とすると、以下のように非能格自動詞は他動詞と同じように主語を外項としてとるが、非対格自動詞は主語を内項としてとる。ここで「外項」「内項」というのはそれぞれ「主語」と「目的語」に相当するものであると考えてよい。概念意味論では「主語」「目的語」という用語を使わず、他動詞の主語を「外項(external structure)」、目的語を「内項(internal structure)」と呼んでいる。つまり外項は動作をする側、内項は動作を受ける側である。これを自動詞に当てはめた場合、意志自動詞の主語は「外項」、無意志自動詞の主語は「内項」に相当すると考えられている。

① 非能格(意志)自動詞： (x < y)

例：走る、歩く

② 他動詞の項構造： (x <y>)

例：割る、読む

③ 非対格(無意志)自動詞： (<y>)

例：割れる、折れる

そして、「語彙的複合動詞」の組み合わせは次の

ような制約条件をもつことを指摘した。(＊は結合できない例)。

- a. 他動詞+他動詞：奪い取る、追い払う、引き抜く
- b. 非能格(意志)+非能格(意志)：言い寄る、飛び降りる、走り寄る
- c. 非対格(無意志)+非対格(無意志)：滑り落ちる、立ち並ぶ、生え変わる
- d. 他動詞+非対格：＊洗い落ちる。＊染め変わる、＊倒し滑る
- e. 非能格+非対格：＊走り転ぶ、＊跳び落ちる、＊回り落ちる
- f. 非対格+他動詞：＊揺れ落とす、＊売れ飛ばす、＊滑り削る
- g. 非対格+非能格：＊崩れ伏す、＊痛み泣く、＊ころがりおる
- h. 他動詞(意志)+非能格(意志)：探しまわる、待ち構える
- i. 非能格(意志)+他動詞：泣きはらす、笑い飛ばす

即ち、語彙的複合動詞の組み合わせは、基本的には外項の有無、つまり外項 x をとる動詞同士か、外項 x をとらない動詞同士によって作られるというのが影山の主張である。例えば、「他動詞+他動詞」「非能格自動詞+非能格自動詞」の組み合わせは外項 x をとる動詞の組み合わせであり、「非対格自動詞+非対格自動詞」は外項 x をとらない動詞の組み合わせである。詳しくは影山(1997: 721)を参照されたいが、これらの制約を簡単な表にあらわすと、次のようになる。

表 1 語彙的複合動詞の組み合わせ

V1 \ V2	他動詞 (+x)	非能格 (自) (+x)	非対格 (自) (-x)
他動詞 (+x)	a (○) (奪い取る)	i (○) (泣きはらす)	f (×) (揺れ落とす)
非能格(自) (+x)	h (○) (探し回る)	b (○) (言い寄る)	g (×) (崩れふす)
非対格(自) (-x)	d (×) (洗い落ちる)	e (×) (走り転ぶ)	c (○) (滑り落ちる)

この制約を影山は「他動性調和の原則」と呼んでいる。因みに「統語的複合動詞」にはこの制約は

ない。

(2)由本(1996)・松本(1998)の研究

由本(1996)と松本(1998)は、影山の「他動性の調和の原則」に対して異論を唱えている。影山は「他動性の調和の原則」に対して、いくつかの分類基準³を示しているが、由本と松本はその分類基準で複合動詞を2分類するのは難しいと指摘した。例えば、影山は「降る」や「死ぬ」を「命令形が可能である」「間接受身になる」などを証拠として非能格(意志)自動詞だと認定して、「降り暮らす」「死に別れる」のような複合動詞が可能だとしているが、松本は「降る」「死ぬ」を非能格(意志)と認定すると「降り積もる」「死に絶える」のように「積る」「絶える」(これらは非対格自動詞)と結合する複合動詞の説明ができないと批判している。そして、由本、松本は、それぞれ「他動性の調和の原則」に変えて「主語一致の原則」を提案している。「主語一致の原則」とは、二つの動詞即ち前項動詞と後項動詞の主語が同じでなければならない、というものである。

ところで、寺田(2001: 22)によると、言語類型論的にみて、「V+V」の複合の形を許す言語は、日本語、韓国語、中国語、タイ語、ヒンディ語、トルコ語などがある。許さない言語は、英語、フランス語、スペイン語、アラビア語、ヘブライ語などである。しかし、「V+V」の複合を許すといっても中国語には「主語一致の原則」は存在しないことが指摘されている(影山 1993: 138)。例えば、中国語では、

張三打死了李四

(張三が李四を殴った結果、李四が死んだ。)

という文が可能であるが、日本語ではいえない。このことから「主語一致の原則」は普遍的なものではなく、日本語の複合動詞の特徴であるといえる。

しかし、確かに「主語一致の法則」を立てることによって、「降り積もる」や「死に絶える」などにはうまく説明できるが、依然として表1でみた「走り転ぶ」のように主語が一致していても不適切な結合になるものがある点については説明できないという問題点が残されているように思われる。

ここで一つ付け加えておかなければならないのは、影山、松本、由本らはいずれも、語彙的複合動詞の中で「～こむ」は例外的な事例であると述べている点である。それは、「～こむ」は「飛びこむ」「投げこむ」「冷えこむ」のように「他動性の調和の原則」を越えて自動詞とも他動詞とも結合するからである。こ

の点について筆者は「～こむ」を例外的事例とは考えていない。それは、現代語の「こむ」には確かに自動詞用法しかないが(そして影山も「こむ」を自動詞と考えているようであるが)、広辞苑第四版には、「こむ」(込む、籠む)の語義として、「内部へ内部へものごとが入り組んで密度が高まること」をあらわす自動詞用法と、「まわりを固くかこんだ中に何かを入れて動かさないようにすること」をあらわす他動詞用法があることが記されている。複合動詞後項の「～こむ」の意味は、現代語の本動詞「こむ」の意味とは乖離しているが、その根底に自動詞用法と他動詞用法があると考え、と、「～こむ」も「他動性の調和の原則」の枠内で説明できるのではないかと考えられるからである。この点については、今後十分な議論が必要となるであろう。

さて、以上が前項動詞と後項動詞がどのような条件下で結合しうるかという結合条件に関する研究の概観であるが、ここで、これらの研究は日本語教育における pedagogical device としてみた場合、冒頭の日本語非母語話者の「(i)結合条件がわからない」という疑問に答え得るか否かについて考えてみたい。確かに大枠の結合条件については明らかにされている。しかし、残された課題も多い。

第一に、「他動性の調和の原則」や「主語一致の原則」に即している、例えば、「パソコンを立ち上げる」は「他動性の調和の原則」にも当てはまらないし「主語一致の原則」にも当てはまらない。また「データをパソコンに読みこむ」は主語が何か分かりにくく、「主語一致の原則」には当てはまらないように思われる。このように留学生が日常的に使う複合動詞の構造が上記の原則に当てはまらなるとすると、これらの原則をそのまま日本語教育の現場に持ち込むことには慎重を期す必要があるように思われる。こうした事例をどう説明するかは今後の課題として残る。

第二に、先行研究で扱われた大枠では対処できない問題もある。例えば、日本語教育の現場では「(家の中に)駆けこむ、走りこむ、這いこむ、忍びこむ」は一般的なのに何故「(家の中に)歩きこむ」には違和感があるのかといった学習者の問いに答えられなければならない。結合条件からみると「(家の中に)駆けこむ、走りこむ、這いこむ、忍びこむ」と「歩きこむ」は何ら変わるところはないのに後者は何故一般的に用いられないのか。この点を説

明するためには、大枠の結合条件だけでなく、もう少し意味の側面に踏みこんだ説明が必要である。その際、「歩きこむ」は結合条件の規則に合わないいわゆる「構造上の空白」(structural gap)なのか、構造上は結合し得る条件を持っているがたまたま他の要因によって使われない「偶然のギャップ」(accidental gap)なのかという問題も併せて考える必要があるであろう。

後者の例として「入りこむ」についてみてみよう。「部屋に入りこむ、隙間風が入りこむ、不純物が入りこむ」という表現は自然なのに、「*夏休みに入りこむ、*ガラスにひびが入りこむ、*保険に入りこむ」などは不自然である。つまり「*夏休みに入りこむ、*ガラスにひびが入りこむ、*保険に入りこむ」における「入りこむ」は、結合条件に違反しないにも関わらず使われない例である。日本語母語話者なら教えられた経験が無いにも関わらずこの点は苦もなく使い分けられるが、日本語教育の現場においては何故後者は不自然なのかの説明が求められるであろう。そのためには「意味論」の領域での説明が有効である。例えば、国広(1998)は「入る」の多義的用法を概略以下のように分析している。

「空間移動」(例: 映画館に入る、隙間風が入る、泥棒が入る、ふろに入る etc.)

「時間移動」(例: 夏休みに入る、雨期に入る etc.)

「抽象移動」(例: 気合いが入る、力が入る、耳に入る etc.)

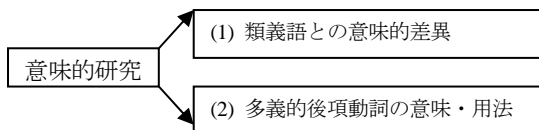
この分析から分かることは、「～こむ」が結合するのは、「空間移動」に限られているということである。勿論、国広の分析は「～こむ」との結合を念頭においたものではないので、すべてをそのまま受け入れられないものもある。例えば「ふろに入りこむ」といえばそれは「入浴」を意味せず、「風呂場への侵入」と解されることになるからである。

このような疑問は日本語教育の現場で呈されるものであり(松田 2002 印刷中)、日本語学及び国語学や言語学のテーマとはなりにくい。複合動詞の意味を日本語教育で扱う場合、先行研究の知見に加えてこうした観点からの研究も不可欠であり、日本語学及び国語学や言語学の知見を取り入れるだけでなく、逆に日本語教育の分野から日本語学、言語学に向けて発信していくべきテーマでもあるが、この点につ

いては後述する。

3. 意味研究 —個々の複合動詞後項の意味に関する研究—

次に意味的な研究についてみてみたい。意味的側面に着目した研究はさらに次のように大別される。



この分野を切り開いたのは、姫野の一連の研究(1975, 1976, 1977, 1978a, 1978b, 1980, 1982, 1982, 1999)である。姫野は、「～つく」「～つける」「～あがる」「～あげる」「～でる」「～だす」「～こむ」「～かかる」「～かける」「～きる」「～ぬく」「～とおす」「～あう」「～あわせる」など複雑な多義的後項動詞の意味・用法を整理・分類し、さらには類義語との意味的差異を明らかにした。姫野以降のこのテーマに関する研究の大半は、姫野の研究に刺激を受けたものである。本稿では姫野の研究の一部しか紹介できないが、これらの姫野の一連の研究によって複合動詞の意味研究は大きく進展したといえる。

以下では日本語教育に関連するいくつかの語彙項目を取り出し、まず姫野の研究を概観した上で、それに続く研究にどのような指摘・反論があるかについてみることにする。その場合、同じ語彙項目を扱っていても研究者によって分析の観点が異なっている。従って、便宜上、(1)(2)の項目をたてて記述するが、実際には(1)(2)が混在する場合があることを付け加えておきたい。

3.1 類義語との意味的差異

ここでは「開始・起動」をあらわす「～だす」と「始める」、完遂をあらわす「～通す」「～抜く」「～切る」についてみてみたい。姫野(1999: 97)は、「開始・起動」をあらわす「～だす」の基本義は「内部に込められていたものが何かのきっかけでどっと外部に出て、ことが始まる」ことであり、「そこには、人為的な力の作用というよりは、内部からあふれた自然なエネルギーの流出が感じられる」として、「～はじめる」と「～だす」の相違点を以下

の5点にまとめている。

- (1) 感情の動きをあらわす語は「～だす」の方が適している。「不意に、急に、ふとしたことで」のような修飾語を伴って突発性が強調される。例：怒る(怒り出す? 怒り始める)
- (2) 不測性を強調する場合は「～だす」の方が適している。例：言い出す(今になって立ち退かないなどと、言い出されても困ります)
- (3) 音の自然発生をあらわす場合は「～だす」の方が適している。例：電話が鳴る(鳴り出す? 電話が鳴り始める)、お腹がなる
- (4) 「今にも～しそうだ」という現実化の直前の様相をあらわす場合は「～だす」の方が適している。
例：降り出す(今にも雨が降りだしそうだ。
?今にも雨が降り始めそうだ。)
- (5) 「～だす」は意志的表現にはそぐわない。
例：?早くやりだせ! 早くやりはじめる!
?今すぐ読みだしたい。今すぐ読み始めたい。

因みに、「～だす」「～始める」と同様に「開始・機動」をあらわす「～かける」については、「～だす」と「～始める」がその動作・作用が続行し、終了に至ることが予想できるのに対して、「～かける」は中断や中止が前提とされることが多いと述べている。

このように、類義語との意味的差異については姫野(1999)によって多くのことが明らかになっているが、姫野が取り上げた項目以外にも日本語教育の現場では、例えば「住みこむ」と「住みつく」、「積みこむ」と「積み上げる」などの使い分けができていない例が散見される。このような例は類似した意味をあらわすわけではないが、学習者は混同する。今後こうした例についても研究の蓄積が望まれる。

3.2 多義的後項動詞の研究

多義的後項動詞の研究は、意味派生のプロセスに着目したものと多義的な意味・用法に着目したものがあ

3.2.1 意味派生のプロセスに関する研究

意味派生のプロセスをみた研究としては、斎藤(1992)、李(1997)、今井(1993)などが挙げられる。斎藤は「～返す」と結合する複合動詞 48 語を対象として、後項動詞「～返す」の意味がどのように抽象

化していくかを単独用法「返す」との意味的関わりから考察している。また李(1997)は「～きる」を取り上げ、本動詞「切る」の多義的意味と複合動詞後項の多義的意味の対応関係を示している。「～きる」には、「完遂」をあらわす用法(走り切る、上り切る)、「極限」をあらわす用法(疲れきる、退屈しきる)、「自信満々」をあらわす用法(演じきる、言いきる)などが指摘されている(森田 1977; 姫野 1980 など)が、それらの用法が本動詞「切る」から派生するものだとし、その派生のプロセスを記述している。

また、今井は本動詞からの派生としては説明しにくい「開始」をあらわす「～だす」(赤ちゃんが泣き出す)を取り上げている。今井(1993: 9)は「～だす」の基本義を「内部からあふれた自然なエネルギーの流出」であるとする姫野(同上)の指摘に対して、①「自然発生的な、突発的な、エネルギーの流出」は「出る」の基本義であって、「だす」の基本義ではない。「～はじめる」と置きかえられるのが、何故「～でる」ではなくて「～だす」なのかという疑問に答えることができない、②「だす」の単独用法の意義と複合動詞後項の意義(=開始・起動)の意義のつながりを十分に明らかにしたとはいえない、と批判し、「泣き出す」のような「起動・開始」をあらわす「～出す」の意味は単独用法「出す」とどのような関わりをもっているのかを認知意味論のイメージ・スキーマという手法を用いて考察している。そして単独用法「出す」がどのような意味派生のプロセスを経て「開始」の意味をあらわすようになるのかを明らかにしている。

これらの研究は、多義的後項動詞の意味の連続性を示すことを目的としたものであるが、日本語教育においても意味の連続性を示すことによって、多義的意味が捉えやすくなるという利点があり、日本語教育の視点に立つ複合動詞研究の切り口としても参考になるアプローチである。

3.2.2 多義的後項動詞の意味・用法に関する研究

一方、多義的後項動詞の意味・用法に着目した研究として挙げられるのは、上述した姫野の一連の研究である。ここでは、多義的後項動詞の中でも特に生産性が高いとされる姫野の「～こむ」の分類について概観し、続いて同じく「～こむ」について認知意味論の観点から分析した松田の研究を取り上げることにする。

<「～こむ」の意味・用法>

(1) 姫野の研究

姫野(1978a, 1999)は、「～こむ」の用法を「内部移動」(=主体あるいは対象がある領域の中へ移動することを表す)と「程度進行」(=動作・作用の進行により程度が高まり、ある密度の濃い状態に達することを表す)の二つに大別している。「内部移動」は「かこむ」(他動詞用法の意味)領域への移動であり、「程度進行」は「密度の濃い状態」(自動詞用法の意味)に達することであるという解釈である。そしてそれぞれ「内部移動」を7グループに、「程度進行」を3グループに分類している。

<「内部移動」の移動先による分類>(全項目については姫野(1999: 62-73)参照)

- ①「閉じた空間への移動」例：投げこむ、飛びこむ、流れこむ、這いこむ、舞いこむ、呼びこむ、蹴りこむ、飲みこむ、落ちこむ、入りこむ、乗りこむ etc.
- ②「固体の中への移動」例：植えこむ、埋めこむ etc.
- ③「流動体の中への移動」例：漬けこむ、もぐりこむ、etc.
- ④「間隙のある集合体または組織体への移動」例：染みこむ、編みこむ etc.
- ⑤「動く取り囲み体への移動」例：くろみこむ etc.
- ⑥「自己内部(自己凝縮体)への移動」例：折れこむ、絞りこむ etc.
- ⑦「その他」例：のぞきこむ、見こむ etc.

<「程度進行」の進行内容による分類>

- ①「固着化」例：眠りこむ、黙りこむ、考えこむ etc.
- ②「濃密化」例：老けこむ、冷えこむ、咳きこむ etc.
- ③「累積化」例：走りこむ、使いこむ、磨きこむ etc.

さらに、「内部移動」とされる用法の中には単なる「内部移動」だけでは済まされぬニュアンスを含む場合もあるとして、次の4点を指摘している。

- ①全体が奥深くはいるという感じがある。

(例：漬物を漬けこむ)

- ②いったん入ったら動かないという固定感がある。

(例：人のうちに上がりこむ)

- ③予期せぬものが入るという抵抗感がある。

(例：泥棒が入りこむ)

- ④人が強い意志を持ってことを行う感じを伴うことがある。

(例：ホテルに泊まりこんで、仕事をする)

しかし、姫野の研究の目的は、できるだけ多くの用例を集め、それを意味分類することにあるため、それぞれの用法間の原理的説明はなされておらず、また何故上記のようなニュアンスが「～こむ」に生じるのかについての説明はなされていない。従って、冒頭の日本語非母語話者の「(ii)単純語(埋める)と複合動詞(埋めこむ)に意味的差異がわからない」という疑問に答えることはできない。何故なら、「飛びこむ」における「～こむ」の意味は、「プールに」のように何かの内部への移動であると説明できるが、「埋める」はもともと「埋める」自体が「カプセルを庭に埋める」のように内部への移動を含意しているため、「埋めこむ」の意味を何かの内部への移動というだけでは、日本語非母語話者にとって「埋める」と「埋めこむ」の意味的差異を説明したことにはならないからである。

(2) 松田の研究——認知意味論による多義的後項動詞の意味分析の試み——

上記のような問題を解決する一つの方法として、松田(2001)は認知意味論の手法を取り入れた研究をおこなっている。認知意味論ではある語の意味に複数の語義がある場合、それらの語義をイメージ図式によって表現する方法が試みられているが(Lakoff 1987; Langacker 1987; 田中 1990, 1997; 国広 1994; Dewell 1994 など)、松田の研究は、理論的背景としてこうした認知意味論の考え方を援用したものである。この論文は、姫野で分類された「～こむ」の多様な用法を、逆に単純な一つのイメージ図式から統一的に説明することを試みたものであり、「～こむ」には多様な意味タイプがあるが、認知意味論の主要な概念であるイメージ・スキーマに「焦点化」(=イメージ図式のどの部分が認知的に際立っているか)という操作を加えるという手法によって、何故そのような多様な意味タイプが可能になるのか、そして個々のタイプはそれぞれどのような関係にあるのかの説明がされている。

松田の研究は「～こむ」のみを対象としたものであるが、認知意味論によるアプローチは多くの多義的後項動詞の意味分析にも適用できる可能性を秘めたものであると思われるので、以下では紙幅を割き、その概要を述べてみたい。

松田は「～こむ」を以下の4タイプに分け(表2)、

認知意味論の考え方を援用して、これらの4タイプを統一的に説明することを試みた。

表2 「～こむ」の意味分類

二格を伴う「～こむ」	
Aタイプ	Bタイプ
V1は「内部移動」を含意しない。	V1自体が「内部移動」を含意する。
例) 飛びこむ、呼びこむ	例) 入りこむ、植えこむ

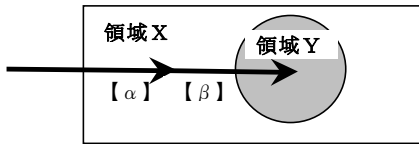
二格を伴わない「～こむ」	
Cタイプ	Dタイプ
V1が示す状態への変化とその状態への固着。(無意志動詞)	V1の反復行為により生じる状態変化。(目標に向けて)(意志動詞)
例) 眠りこむ、冷えこむ	例) 十分に走りこむ

表2にみるように、「～こむ」は「(移動先をあらわす)二格を伴う用法」と「二格を伴わない用法」がある。「二格を伴う用法」は、姫野(1999)では「内部移動」として一括りにされている。しかし、学習者は「プールに飛びこむ」における「～こむ」は「内部移動」として理解できるが、「入りこむ」はV1の「入る」自体が「内部移動」をあらわすのに何故「～こむ」をつけるのか分からないという疑問をもつ。そこで松田は「二格を伴う用法」をさらにふたつのタイプに分けた。即ち、「飛びこむ、人を呼びこむ」のようにV1自体は「内部移動」をあらわさないが、「～こむ」が付加されることによって「内部移動」をあらわすようになるタイプ(Aタイプ)と、「入る、植える」など既に「内部移動」を含意しているV1に「入りこむ、花を植えこむ」のように、さらに「～こむ」が付加されたタイプ(Bタイプ)の2タイプである。

他方、「二格を伴わない用法」もふたつのタイプに分けられることを示した。即ち、「眠りこむ」のようにV1の示す状態へ状態が変化(=「眠っていない状態」から「眠っている状態」への変化)し、「～こむ」は「その状態に固着する」ことをあらわすタイプ(Cタイプ)と、「十分に走りこむ」のようにV1の反復行為あるいは長時間にわたる行為により生じる状態変化(例えば「十分に走りこむ」は、「走る」という反復行為により、(マラソンに出場するという目標にむけて)「満足できない状態」から「満足できる状態への変化」)をあらわすタイプ

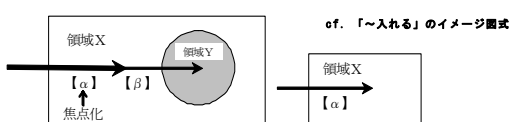
(Dタイプ)のふたつである。そして、4タイプの「～こむ」の意味をコア図式〔図1〕を用いて統一的に説明した。

図1 「～こむ」のコア図式



コア図式は次のように説明されている。図1における四角はある領域(領域X)を示しており、また網掛で示した円(領域Y)は領域X内での「難可逆的な領域」(=主観的に、領域Xの外に出るのが困難だと感じられる領域であり、物理的に領域Yが存在するわけではない)をイメージしたものである。矢印【α】の部分は領域Xに入ることの意味的イメージを、矢印【β】の部分は領域Yに入ることの意味的イメージをあらわしている。コア図式は、ことばの具体的な意味ではなく、その根底にある意味的イメージである。即ち、【α】は「内部への移動」、「～の中に入る／入れる」などのことばで表現される意味的イメージであり、【β】は「増毛で髪を頭に植えこむ。」にみられるように「すぐ取れないように、しっかりと植える。」(=その場へ留める)や「500円が隙間に入りこんだ。」にみられるように「狭いところ／取り出しにくいところに、入った。」(=その場へ留まる)などのことばで表現される意味的イメージである。「～こむ」は「内部への移動」(【α])と「その場への固着」(【β])のふたつの意味的イメージをその根底に併せもっていると考え、図1をすべての「～こむ」の用法を包含するコア図式として仮設した⁽⁴⁾。そして、コア図式で示した意味要素のどの部分が強調されているかという知覚心理学でいうところの「図地分化」の概念を用いて、上記の4タイプの関係を以下のように説明した。

図2 Aタイプ「～こむ」のイメージ図式

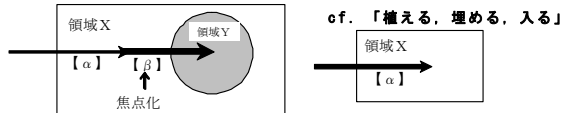


Aタイプのイメージ図式は図2のようになる。Aタイプは「飛ぶ、投げる、呼ぶ、どなる」など前項

動詞(V1)が「内部移動」を含意しないため、「～こむ」の意味要素のうち、「内部への移動」という要素【α】が「図」として際立つ。そのため「投げこむ」は「～の中に入れる」という意味となる。しかし、【α】が強調されるが「～こむ」は【β】を「地」として併せもつ故に「～入れる」とは異なる。尚、認知言語学では「図」の概念に対して「プロファイル(profile)、トラジェクター(trajjectory)、焦点化」などの用語が用いられているが⁽⁵⁾、松田では「焦点化」が用いられている。

(II)Bタイプ(例:入りこむ、埋めこむ、植えこむ、住みこむ etc.)

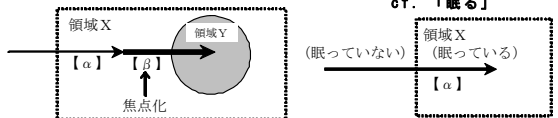
図3 Bタイプ「～こむ」のイメージ図式



Bタイプのイメージ図式は図3のようになる。Bタイプは「(領域Yに入り)その場に留まる」という要素【β】が「図」として焦点化された用法である。Bタイプは「入る、埋める、植える、住む」などV1が既に「内部移動」を含意しており、【α】の部分は重複する。そのため、【α】の部分は「地」として後退し、【β】の部分が「図」として際立つ。この点が単なる「植える、埋める、入る」と異なり、Bタイプの「～こむ」の意味は「しっかりと、奥深くV1する」などの意味となる。

(III)Cタイプ(例:眠りこむ、黙りこむ、冷えこむ、老けこむ etc.)

図4 Cタイプ「～こむ」のイメージ図式

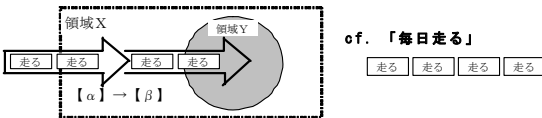


Cタイプは「(移動先をあらわす)二格を伴わない用法」であるが、松田は、Cタイプの「～こむ」もある種の「内部への移動」をあらわしていると捉えている。即ち、「眠りこむ」を例にとれば、「眠っていない状態」から「眠っている状態」への状態変化は抽象的な「内部への移動」として捉えることができる。Cタイプの「～こむ」が可能になるのは、ある状態の中にいることを「内部」として認知すると

いうわれわれの認知の仕方が関与しており、このような認知作用が働くからこそ実際の「内部移動」を伴わない状況でも「眠りこむ、黙りこむ」のように「～こむ」を用いて表現することができる、という解釈である。C タイプの領域 X が点線であらわしてあるのは、状態変化を抽象的な移動先として捉えたためである(図4)。「眠りこむ」は「眠っていない状態」から「眠っている状態」に変化(【α】の部分)し、「その状態に留まる」(【β】の部分)という意味になる。

(IV)D タイプ(例:十分に走りこむ、台本を詠みこむ、床を磨きこむ etc.)

図5 Dタイプ「～こむ」のイメージ図式



D タイプの「～こむ」も抽象的な「内部への移動」をあらわしている。D タイプにおいて何が抽象的な移動をするかといえば、V1 のあらゆる反復行為により、「満足できない状態」から「満足できる状態」への変化が抽象的な移動として捉えられている。例えば、「十分に走りこむ」は「走る」ことの反復行為「(マラソンに向けて)「満足できない状態」から「満足できる状態」への変化をあらわしており、それ故に単なる反復行為である「毎日走る」とは異なる。D タイプのイメージ図式は図5のようになる。

以上が松田(2001)で示した「～こむ」の分析の概略であるが、この研究の意義として次の2点を挙げている。

- ①「～こむ」のコア⁶を明らかにすることで上記の「埋める」と「埋めこむ」のニュアンスの違いを説明することができる。
- ②多様な用法を分類するだけでは意味構造の複雑さに目が行ってしまい、学習者の負担を軽減することはできないが、それらの用法のつながりは実は単純な図式(=コア)をもつということを学習者に提示できれば、「～こむ」の用法と図式との相互参照によって、ネイティブが無意識に内在化しているであろう「～こむ」の概念の獲得を助け、個々の用法を一つずつ覚えるという学習負担が軽減できる。

効率的な語彙指導のためには、複雑なものを単純な形で整理しておくことが求められるが、単純な形で整理する方法として、認知意味論の図式による方法は非常に有効であるように思われる。松田の「～こむ」の分析例は、他の多義的後項動詞への応用を示唆するものであり、また複合動詞を体系的に教える方法の可能性を探るための新しい試みであるといえよう。

4. 他の言語との対照研究

上述したように、「V+V」の複合形が許される言語は日本語の他、韓国語、中国語、タイ語などであるが、複合動詞の対象研究として挙げられるのは韓国語との対象である。

(1)生越(1983)の研究

韓国語との対照研究としてまず挙げなければならないのは、生越(1983)である。生越は、日本語の生産性の高い複合動詞後項が朝鮮語(生越の記述)ではどう訳されるか、を手がかりとして複合動詞後項を2種類に分けている。その一つは韓国語では副詞・副詞的語句と対応するものであり、今一つは韓国語では全く別の表現となるものである。

- a. 日本語のV2 に対し、韓国語では副詞・副詞的語句と対応するもの: 一合う、一上げる、一誤る、一終える、一終わる、一返す、一切る、一過ぎる、一足りる、一違う、一尽くす、一つける、一続ける、一通す、一直す、一抜く、一まくる、一間違える、一間違う
- b. 韓国語では別の表現になるV2: 一遅れる、一落とす、一損なう、一損ねる、一損じる、一得る、一かかる、一かける、一かねる、一そびれる、一だす、一残す、一始める、一忘れる、(一飽きる、一慣れる)

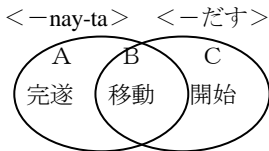
(2)李(1998)の研究

李(1998)は、日本語の「～だす」と韓国語の「-nay-ta」との比較をおこない、二者の意味のずれを指摘している。即ち、日本語の「～出す」は「持ち出す」のように「移動」をあらわす場合と「泣き出す」のように「開始」をあらわす場合があるが、韓国語の「～出す」に相当する「-nay-ta」は「移動」と「完遂」をあらわす。因みに、「完遂」は日本語では「～きる、～ぬく」であらわす(図参照)。

そのため、韓国語母語話者は A の意味で「～出す」を使ってしまおうと予測している。このことから対訳による学習には限界があることがわかる。

- ・ 机を持ち出した (移動)
- ・ あかちゃんが泣き出した (開始)
- ・ 暴力に耐え抜いた／*だした (完遂)

図6 <-nay-ta> <-だす>の領域



冒頭の疑問「(iii) 習得の方法」の項で「母語での対訳はあまり効果がなかった」「作り方の生産性が高いものもあるので、2 つに分けて覚えようとしたが効果がなかった」というコメントを紹介したが、対照研究によって、学習者母語と日本語との意味領域の差異が明らかになり、教育の現場でもそれを提示できるようになれば母語の対訳による学習をまったく回避する必要もなくなり、学習者の負担の軽減につながるのではないだろうか。

因みに、韓国語以外の言語との対照研究としては、日中両語の結果をあらかず複合動詞を比較した望月(1990)、日本語の「～だす」とベトナム語の「～RA」との対照比較(レー 1990)、日本語の「～直す」と英語の接頭辞 re-との比較(由本 1998)などが報告されているが、本稿では割愛する。

5. 今後の課題と展望

以上、テーマごとに複合動詞の主な研究を概観し、日本語教育の問題と絡めて考察した。今まで、日本語教育の分野で複合動詞教育が遅れてきた理由の一つとして、前項動詞と後項動詞の相互作用によって成立する意味が一樣でなく複雑な様相を呈しているという点が挙げられる。しかしながら、上でみたように日本語学や言語学の分野では多くの知見が蓄積されている。今後の展望として挙げられる複合動詞研究の方向性は、第一に、複合動詞の結合条件や意味に関するものが挙げられる。上述したように、日本語教育の視点からみれば、日本語学、言語学の分野では今まで扱われてこなかった結合条件や意味の問題がある。これらは日本語教育の見地から日本

語学や言語学の分野に発信していくべきテーマである。その際、意味分析の方法論として、松田が試みたような認知言語学及び認知意味論の考え方が示唆を与えてくれるだろう。

最近の動向として認知言語学の考え方を第二言語習得の分野に取り入れる試みがなされている。例えば、森山(2000)は動詞活用形の習得過程や習得順序などに関してさまざまな実験的研究をおこない、習得と認知の関係を明らかにした上で、第二言語習得を説明するにふさわしい理論的パラダイムとして認知言語学を取り入れることが有望であることを示した。森山の研究は、意味の分野に限らず、認知言語学の考え方を言語習得の分野に援用することの有効性を示す魁となる研究であろう。

第二の方向は、複合動詞の習得研究の可能性である。最近になってやっと、上でみたような日本語学および言語学の知見を援用した習得研究もみられるようになってきたので、ここで習得研究を二つ紹介しておきたい。

(1) 寺田(2001)の研究

寺田(2001)は、影山らの複合動詞には「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」があるという主張を受けて、二者は、異なるメカニズムによって習得されるという仮説をたて、帰国子女を対象に複合動詞の習得に関する調査をおこなった。その際、枠組みとして用いたのは、Mental Lexicon 仮説 (Pinker 1989, 1991; Pinker & Prince 1991)である。mental lexicon というのは、語彙が習得されているという時、頭の中に語彙の何がどのように内在化されているかという、ひとりひとりが持っている脳内辞書とでもいうべきものである(田中 1994 : 72)。語彙習得ではこの mental lexicon の形成が重要になるが、寺田(2001 : 23)によれば、Pinker らは、英語の動詞過去形の習得では 3 種類の異なるプロセスを経て mental lexicon が形成されていくと提案した。即ち、動詞の過去形は“-ed”をつけるという規則に基づく語形成と、不規則動詞の中でもある種のパターンがあり頻度と類推とで連想記憶が形成されるタイプ (swing-sprung) と全く規則も連想もなくそのまま覚えるだけのタイプ (go-went, be-was) があり、同じ動詞の過去形といっても①規則を適用していく default タイプ、②頻度と類推によって連想記憶を作るタイプ、③そのまま丸ごと覚えるもの、の3つの異なるプロセスを得て習得されると指摘した。

寺田は、Pinker らの Mental Lexicon 仮説を用いて、「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」は異なるプロセスを得て mental lexicon が形成されていくと仮定した。つまり、前者はPinker らのいう①規則を適用していく default タイプであり、後者は②頻度と類推によって長期記憶に載せる(=mental lexicon にリストして覚える)タイプであろうとする習得仮説をたてた。そして、次のような予測をたてた(2001: 24)。

<仮説>

1. 帰国子女はインプット量に関係なく default な知識で形成できる「統語的複合動詞」は間違わないが、連想記憶の形成に依存する「語彙的複合動詞」は間違いが多い。
2. 「語彙的複合動詞」にも default な規則を適用し誤りが起こる(例えば、「本を置き忘れた」と「鍵をかけ忘れた」で、両方とも前項動詞を「忘れた」という後項動詞の項として同様の処理をする結果、「本を置くことを忘れた」と誤って解釈してしまう)。

<調査対象者> 慶応大学学部生で海外での生育歴が3年以上ある帰国子女 60名(どこの国かは述べていない)。統制群は同年齢の日本で育った学部生 60名。

<方法> 質問紙(①日本語の複合動詞の作成、②理解、③判定テスト)⁷

その結果、予想どおり海外滞在年数の多寡に関わらず「統語的複合動詞」は誤りが少ないのに対して、「語彙的複合動詞」は海外滞在年数が長いほど誤用が増えたと報告している。さらに、海外滞在年数を3年ごとに区切り、その期間にどのような教育を受けていたか(現地校、日本人学校)を分けて分析したところ、海外で現地校のみに通った帰国子女がすべての年齢区間で「語彙的複合動詞」の誤りが多いことが分かった。このことから、寺田は日本語のインプット量が少ないと「語彙的複合動詞」の誤用が多いという仮説が示唆されたとしている。2の予想についても予想どおりの結果となった。即ち「彼に雑誌を買い求める」の解釈を「彼が雑誌を買うことを私が頼む」というように全体を補文関係として解釈する誤りが多く観察されたと報告している。寺田の研究は、当該言語項目(ここでは複合動詞)の言語理論を踏まえ、また習得を説明する仮説を踏まえた習得研究として評価できる一方で、意味の習得研

究には常に付きまとうことであるが、選択された項目が適切であったかどうかについては疑問が残る。また統計についても疑問が残る(小熊利江氏の指摘による)。

(2)松田(2002印刷中)の研究

寺田が体系的研究の知見を援用したのに対して、松田(2002印刷中)は、意味的研究の研究成果を用いて意味習得の側面に着目した研究をおこなっている。松田の目的は、学習者による「～こむ」の運用力をみることであり、方法は「～こむ」と結合する複合動詞 54語を提示し「短文の産出」をもとめるというものであった。その結果、調査対象者は「友人の名前を呼びこむ」のような誤文を多く産出した。それは「～こむ」の意味の一般化が不十分なため、「N+VI」≒「N+{VI+こむ}」方略を用いて、「友人の名前を呼ぶ」から「友人の名前を呼びこむ」を産出したと考えられる。一般化ができない理由として松田は、「～こむ」に多様な意味があることを知っていても、どのような結合タイプにどの意味を照応していいかわからず、意味の照応(matching)ができないためであろうと推測している。

「～こむ」のように多くの前項動詞と結合する複合動詞は、個々の「VI+こむ」を一つずつばらばらに理解するのは非効率的である。効率的な指導のためには、何らかの一般化を促す方法が必要である。そのためには、基礎研究として意味研究と習得研究の双方が求められるが、ここで指摘しておかなければならないのは、日本語教育のための意味研究は当該語の意味構造を明らかにするという目的だけでなく、習得研究においても不可欠の条件になるということである。それは、当該語の妥当な意味分析なくして、調査データを分析する際の妥当な枠組みを提示ことはできないからである。

第三の方向性としては対照研究が挙げられる。上述の対照研究のところのみたように、例えば、日本語の「～だす」と韓国語の「-nay-ta」はカバーする意味領域が異なっていることが報告されている。また李・川口(近刊)は、「～こむ」に対応する韓国語の形式は10種類に及ぶと報告している。複合動詞を含む語彙習得においては、学習者母語の影響が根強く残るとされるが(松田 2000a, 2000b など)、そうだとすると、効果的な複合動詞指導のためには学習者母語との対照比較は不可欠であり、対照研究の知見をもとに、複合動詞の意味習得における母語の

影響を探るという方向の研究も必要である。

以上、複合動詞研究の展望として3つの方向性を挙げた。日本語教育の分野における複合動詞研究は未開拓の分野であるが、効率的な複合動詞指導のためには、その基礎研究としてさまざまな角度からの研究が求められる。基礎研究が蓄積されれば、そこから効率的な指導法への道を拓くことができるからである。今後の研究が期待される。

注

1. 関係文法(Perlmutter 1978)の研究で発見された概念。
2. [open, break]のように同形で自他両用の自動詞を「能格動詞」、[occur, happen, appear]などのように自動詞しかないものを「非対格動詞」と呼んで区別しているが、日本語では同形で自他両用の自動詞は少ないので、影山は「非対格」自動詞として記述している。
3. ①「そうする」が使えるか。
統語的複合動詞：花子はテレビを見すぎる。
→太郎もそうすぎる。
語彙的複合動詞：花子はプールに飛び込んだ。
→*太郎もそうし込んだ。
②受身形ができるか。
統語的複合動詞：読み始める→読まれ始める
語彙的複合動詞：名前を書き込む→*名前が書かれ込む
③主語尊敬表現がつけられるか。
統語的複合動詞：先生が手紙をお書きになり始めた。
語彙的複合動詞：*先生が名前をお書きになり込んだ。
4. 広辞苑第四版によると、「こむ」(籠む, 込む)の語義は、自動詞としては「内部へ内部へものごとが入り組んで密度が高まること」、他動詞としては「まわりを固くかんだ中に何かを入れて動かさないようにすること」である。ここでは「～こむ」はこのふたつの意味を根底に併せもっていると考えている。
5. Langacker (1989)は認知領域を profile(=活性化した概念領域)と base(=背景となる領域)という用語で説明し、Lakoff (1987)は trajectory(軌道)と landmark(道標)という用語で説明しようとするが、これらはいずれも「図」と「地」に相当すると考えてよい、また国広、田中は認知的に活性化した概念領域を「焦点化」と呼んでいる。松田は国広、田中に倣って「焦点化」と呼んでいる。
6. ここでいう「コア」とは、「～こむ」の用法のすべてを包含する抽象的な意味をあらわす。図式イメージで「円錐形の頂点」のようなもの。
7. 教示文①：二つの同士を組み合わせて一つの動詞を作ります。どんな組み合わせですか。
例：(1)始まる、食べる、始める (2)かわる、買う、かえる (3)尽くす、使う、尽きる (4)焼く、死ぬ、
教示文②：次の文はどんな意味ですか。正しいと思うほうに○をつけてください。
例：(1)書類を家に置き忘れた。
1)書類を家に置いてくることを忘れてしまった。

2)書類を家に置いてきてしまった。

(2)玄関の鍵をかけ忘れた。

1)玄関の鍵をかけてくることを忘れた。

2)家の鍵をかけたかどうか忘れた。

教示文③：次の動詞はどんな意味ですか。正しいと思うものに○をつけなさい。

例：(1)切り落とす： 1)切って落とす 2)切ることを忘れる 3)たくさん切ること

(2)咲き乱れる： 1)咲いて乱れる 2)たくさん咲くこと 3)たくさん乱れること

教示文④：次の意味で「 」の中の語を使いますか。使うときは○、使わないときは×をつけてください。

例：「踊り狂う」： ()夢中になって躍るとき。

「見向かう」： () 広告をみて、そこへ買いに向かったとき。

「殴り死ぬ」： () けんかの相手を殴ったら、相手が死んでしまった。

参考文献

- 石井正彦(1988)「辞書に載る複合動詞・載らない複合動詞」『日本語学』1-7, 33-43.
- 今井忍(1993)「複合動詞後項の多義性に対する認知意味論によるアプローチ『～出す』の起動の意味を中心にして」『言語学研究』12, 京都大学 1-24.
- 生越直樹(1983)「日本語複合動詞後項と朝鮮語副詞・副詞的な語句との関係」『日本語教育』52, 55-64.
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎(1996)『動詞意味論——言語と認知の接点——』くろしお出版
- 影山太郎・由本陽子(1997)『語形成と概念構造』日英比較選書8 研究社出版
- 国広哲弥(1994)「認知的多義——現象素の提唱——」『言語研究』106, 23-43.
- 国広哲弥(1998)『理想の国語辞典』大修館書店
- 斎藤倫明(1985)「複合動詞後項の接辞化——『返す』の場合を対象にして——」『国語学』140, 120-132.
- 斎藤倫明(1992)『現代日本語の語構成論的研究——語における形と意味——』ひつじ書房
- 斎藤倫明・石井正彦(1997)『語形成』日本語研究資料集第1期第13巻 ひつじ書房
- 田中茂範(1990)『認知意味論：英語動詞の多義の構造』三友社出版
- 田中茂範(1997)『空間と移動の表現』日英語比較選書6 研究社出版
- 田中実(1994)「語彙の習得」『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』大修館書店 70-88.
- 塚本秀樹(1993)「複合動詞と格支配—日本語と朝鮮語との対照研究—」仁田義雄『日本語の格をめぐって』くろしお出版 225-246.
- 寺田裕子(2001)「日本語の二類の複合動詞の習得」『日本語教育』109, 20-29.
- 寺村秀夫(1978)『日本語の文法(上)』日本語教育指導参

考書 4 国立国語研究所

- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 長嶋善郎(1976)「複合動詞の構造」『日本語講座 4 日本語の語彙と表現』大修館書店 63-104.
- 長嶋善郎(1997)「複合動詞の構造」『語構成』(斎藤倫明・石井正彦編) ひつじ書房 213-231.
- 野村雅昭・石井正彦(1987)『複合動詞資料集』国立国語研究所報告
- 姫野昌子(1975)「複合動詞『～つく』と『～つける』」『日本語学校論集』2, 東京外国語大学 52-71.
- 姫野昌子(1976)「複合動詞『～あがる』、『～あげる』および下降を表す複合動詞類」『日本語学校論集』3, 東京外国語大学 91-122.
- 姫野昌子(1977)「複合動詞『～でる』、『～だす』」『日本語学校論集』3, 東京外国語大学 83-102.
- 姫野昌子(1978a)「複合動詞『～こむ』、および内部移動を表す複合動詞類」『日本語学校論集』5, 東京外国語大学 47-70.
- 姫野昌子(1978b)「複合動詞『～かかる』と『～かける』」『日本語学校論集』6, 東京外国語大学 37-61.
- 姫野昌子(1980)「複合動詞『～きる』と『～ぬく』『～とおす』」『日本語学校論集』7, 東京外国語大学 23-46.
- 姫野昌子(1982a)「対称を表す複合動詞—『～あう』と『～あわせる』をめぐって—」『日本語学校論集』9, 東京外国語大学 17-52.
- 姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 松田文子(2000a)「日本語学習者による語彙習得」『世界の日本語教育』10, 73-89.
- 松田文子(2000b)「複合動詞の意味理解方略の実態と習得困難点」『言語文化と日本語教育』20, 52-65.
- 松田文子(2001)「コア図式を用いた複合動詞後項『～こむ』の認知意味論的説明」『日本語教育』111:16-25.
- 松田文子(2002 印刷中)「日本語学習者による『～こむ』の習得」『世界の日本語教育』12
- 松本曜(1998)「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114, 73-83.
- 望月圭子(1990)「日・中両語の結果を表わす複合動詞」『東京外国語大学論集』40,13-27.
- 森田良行(1978)「日本語の複合動詞について」『講座日本語教育』早稲田大学語学教育研究所 69-86.
- 森山新 (2000)『認知と第二言語習得』凡人社
- 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 山崎恵(1995)「開始の局面を取り立てる局面動詞について—『～始める』、『～出す』の用法比較—」『阪田雪子先生古希記念論文集 日本語と日本語教育』三省堂 89-92.
- 山本清隆(1984)「複合動詞の格支配」『都大論究』21,32-49.
- 由本陽子(1996)「語形成と語彙概念構造」奥田博之教授退官記念論文集『言語と文化の諸相』英宝社 105-118.
- 由本陽子(1997)「複合動詞を作る『～直す』の意味構造—英語の接頭辞 re-との相違を参考に—」『言語と文化と対話』英宝社 177-191.
- 李暲洙(1996)「日・韓両言語における複合動詞『～だす』と『-nay-ta』の対照研究」『日本語教育』89, 76-87.
- 李暲洙(1997)「前項動詞『切る』、後項動詞『～切る』と関連づけて」『世界の日本語教育』72, 19-232.
- 李潤玉・川口義一 (近刊)「日本語複合動詞と韓国語の対応—[動詞連用形+込む]に関する考察—」『梅田博之教授記念論文集』
- レー パン クー(1990)「日越両語における複合動詞『～だす』と『～RA』との対照比較」『日本語教育』72, 117-144.
- Dewell, R. B. (1994) *Over again: Image-schema transformations in semantics analysis. Cognitive Linguistics* 5, 351-380.
- Lakoff, G. (1987) *Women, fire and dangerous things: What categories reveal about the mind.* Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of cognitive grammar. Vol.1.* Stanford, CA: Stanford of University Press.
- Li, Y. (1990) On V-V Compounds in Chinese, *Natural Language and Linguistic Theory* 8, 177-207.
- Matsumoto, Y. (1996) *Complex predicates in Japanese: A syntactic and semantic study of the notion 'Word'.* Stanford, CA: CSLI Publications and Tokyo: Kuroshio Publishers.
- Perlmutter, D. (1978) Impersonal passives and the unaccusative hypothesis, *BLS* 4, 157-189.
- Pinker, S. (1991) Rules of language. *Science* 253, 530-535.
- Pinker, S. & Prince, A. (1991) Regular and irregular morphology and the psychological status of rules of grammar, *BLS* 17, 2230-2251.

Japanese compound verbs: A review of the literature, the need for future research, and the pedagogical implications for teaching Japanese as a foreign language

MATSUDA Fumiko

Abstract

This study aims at reviewing previous studies in the area of Japanese compound verbs, and showing what should be further studied in the future. The target of the review includes those studies dealing with (1) the conditions on compounding the two elements to form compound verbs, (2) the meanings and usages of suffixing elements, and (3) cross-linguistic analyses of compound verbs. In order to suggest the need for future research, we discuss some of the major problems emerging when analyzing and categorizing diverse usages of polysemous suffixing elements, and show that a cognitive semantic approach provides an effective analytical tool overcoming those problems.

It has been shown that learners of Japanese as a foreign language find it extremely difficult to acquire generalized semantic rules in the area of compound verbs and, as a result, they are simply overwhelmed by the semantic diversity. This also motivates more research to be carried out. We suggest that in order to have pedagogical implications, future research should further explore the following three areas of study: (1) semantic studies employing a cognitive semantic approach, (2) acquisitional studies of compound verbs by learners of Japanese, and (3) cross-linguistic studies comparing and contrasting Japanese and learners' native languages.

【Key words】 grammatical compound verb, lexical compound verb, unergative verb, unaccusative verb, polysemous suffixing element

(Department of Applied Japanese Linguistics, Graduate School, Ochanomizu University)